

尾崎紅葉集

日本近代文学

日本近代文学大系 5

尾崎紅葉集

解説 福田清人

注釈 岡 保生

吉田精一



角川書店

福田清人（ふくだきよと）

明治37年（1904）長崎県に生まれる。昭和4年（1929）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現職立教女学院短期大学教授、実践女子大学講師。主著『国木田独歩』（昭12 新潮社）、『俳人石井露月の生涯』（昭24 講談社）、『硯友社の文学運動』（昭25 巧芸社）、『日本近代文学紀行』（昭29 新潮社）、『十五人の作家との対話』（昭30 中央公論社）、『近代日本の文学史』（昭34 春歩堂）。

岡 保生（おか やすお）

大正12年（1923）三重県に生まれる。昭和20年（1945）早稲田大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現職昭和女子大学教授。主著『尾崎紅葉—その基礎的研究—』（昭28 東京堂）、『尾崎紅葉の生涯と文学』（昭43 明治書院）、『評伝小栗風葉』（昭46 桜楓社）。

吉田精一（よしだせいいち）

明治41年（1908）東京市に生まれる。昭和7年（1932）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学、比較文学専攻。現職埼玉大学教授、教養学部長。文学博士。主著『近代日本浪漫主義研究』（昭15 武蔵野書院）、『明治大正文学史』（昭16 修文館）、『芥川龍之介』（昭17 三省堂）、『自然主義の研究』（昭33 東京堂）、『現代文学と古典』（昭36 至文堂）、『文学入門』（昭41 旺文社）、『古典文学入門』（昭43 新潮社）。

日本近代文学大系 全60巻

第5巻 尾崎紅葉集

昭和46年10月10日 初版発行



七五三

別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所 株式会社 角川書店

注 釈 者	岡 保 生
	吉 田 精 一
発 行 者	角 川 源 義
印 刷 者	中 内 佐 光
製 本 者	鈴 木 俊 一

東京都千代田区富士見2-13-3
電話東京（265）7111 〈大代表〉
振替東京 195208
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替えいたします

晝印刷・鈴木製本

0393-572005-0946(0)

目次

凡例

五

尾崎紅葉集解説

福田清人 七

尾崎紅葉集注釈

金色夜叉

岡保生 丑一

江戸水

吉田精一 四三

文盲手引草

吉田精一 四五

補注

五三

参考文献

五三

年譜

五四

注釈者あとがき

五五

凡 例

- 一、本書は、尾崎紅葉の作品の中から、小説「金色夜叉」、エッセイ「江戸水」「文盲手引草」の三篇を収録した。
- 一、本書は、解説・右の作品本文・本文に関する注釈（頭注および補注）・参考文献・年譜をもって構成した。
- 一、本書の本文は、「金色夜叉」は『尾崎紅葉集』（明治文学全集）18、昭40・4 筑摩書房刊）所収本文を底本とした。ただし、左記諸本を参照し、改行その他若干の誤記・誤植などを訂正した。

1 『金色夜叉 前編』（明31・7 春陽堂刊）、『金色夜叉 中編』（明32・1 同）、『金色夜叉 後編』（明33・1 同）、『金色夜叉 続編』（明35・4 同）、『続々金色夜叉』（明36・6 同）。

2 『紅葉全集』第六卷（明37・12 博文館刊）。

3 『紅葉集』第四卷（明43・4 春陽堂刊）。

4 『尾崎紅葉全集』第六卷（昭16・6 中央公論社刊）。

5 『新続金色夜叉』（『新小説』明36・1―3）。

なお、1を「初版本」、2を「全集本」、3を『『紅葉集』本」、4を「中央公論社版全集本」、5を『『新小説』掲載稿』と略称し、頭注および補注に使用した。

「江戸水」「文盲手引草」は『恋山賤』（明41・10 梁江堂刊）所収本文を底本とした。なお、「江戸水」は「文庫」二四、二五号（明22・7―8）、「文盲手引草」は「文庫」二六、二七号（明22・9―10）初出の本文を参照した。

一、本文の表記は、明らかなる誤字・誤植・誤記を除き、かなづかい・段落・句読点や符号の用い方など、右底本に従った。

一、注釈は、見開き二ページごとに本文の部分に一、二、三……の番号を付した上で、それぞれについての頭注を各ページ上段に収めた。頭注で十分に注し得ないものについては、↓印を付し、補注で詳述した。なお、頭注のはみ出した部分は作品末尾に各ページごとに一括して収めた。

一、本文を除く表記は、新字体新かなづかいによることを原則としたが、引用文ではかなづかいのみ原文のままとした。

一、注釈中の数字は、引用文を除き「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように表記した。ただし、年号などを（ ）の中に入れる場合は洋数字により、（明23・3）（大14・10）のように示した。その際、明治以降の年号に限っては、それぞれ、明、大、昭和略記した。

一、注釈で各種文献から引用し、または文献に言及する場合、単行本は『』、新聞・雑誌及び作品の題名・論文名などは「」で示した。

一、注釈内容は、頭注は語釈のほか、作品の発想・構成や背景・主題の把握等の事項注にも注意した。補注は頭注の不足を補い、特に成立事情や素材や、出典の考証、モデルの詮索にも及んでいる。

解 説

尾崎紅葉集解説

福田 清人

生い立ち

尾崎紅葉は、慶応三年（一八六七）二月一六日——太陽暦では一八六八年一月一〇日——江戸芝中門前町に生まれた。本名徳太郎である。そして、明治三十六年（一九〇三）一〇月三日、東京市牛込区横寺町四七番地の自宅で逝いた。時に三七歳であった。

死後四年目、明治四〇年九月一八日、『明治文豪伝之内 尾崎紅葉』と題する伝記が文禄堂書店から刊行された。編者は松原至文であるが、この伝を出すについて、巻頭に「上下二千年の間、文芸の昌なること、わが明治の如きは、実にその匹類を見ざるところ」として「英の処女王朝、伊のルネッサンス時代に較照して、尚且つ譲るところなきを見る」とまで自誇して、その歴史は後世必ず書く人が多いだろうが、「昨の事実を今に伝ふる新聞紙にして尚且つ多少の歪曲あり、況んや文芸の士は社会活動の圏外に立つが故に、その個人の云為や、団体の行動や、表面潮流以外の暗流底流、さてはその眉目手足、行住座臥や、誰か之れが真を語り伝へむ。今にして明治文豪伝を編す、あへて太早とはいふべからず、且つや之れを年代史的に編するよりは、個々の人を捉へ来つて、之れが故旧親戚にその生前のこと一一を叩き、細かに記し、細かに評議するか、復かに興味多きをおもふ。旧盟逝いて、知親ことごとく去るとき、時の頹敗のすべてを堙滅するを奈如」そこでこの急務の自覚の上に立って、できるだけ興味深く之を編しようとしたと述べている。

そしてその第一編に尾崎紅葉、第二編に高山樗牛が予定されて予告が載っているが、樗牛の伝記はついに出なかった。

紅葉を最初に取り上げたについては、つづいてその本の序に、「明治文学史てふ円線の間に、尾崎紅葉の四文字が、果して幾何量の延長を取るべきかは、今にして容易く知り得べからざる、而して知るに最も興味ある疑問也」といちおう冷静な態度を表明しながら、そしてその功績を分つべきものとしては、山田美妙、坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外等の名を挙げ、なおその外にも多々あらうけれども、もし紅葉がなかったならば「わが文壇は——分けて言はゞわが文章界は——いかに荒寥不毛なる原人的風光のまゝに残りたりけむ。さればかゝる恩人のために一大騏驎閣を基かんば、時代を同うせる子の務めなるべくして」うんぬんとも述べている。

その後、雑誌の追悼号等で多くの作家の生涯を偲ぶものは出たが、単行本として、その死後数年の間にいち早くその伝記が出た例はこの紅葉以前にはなかった。またこの伝記は、前記のように死後四年目に出たことで、故人の親近者の記憶も鮮明であつたであらうし、紅葉像をたどる実感にみちている思いがする。

それで、その生い立ちの根本はこの本によりながらも、一方その後発見された資料等で補いつつ記して行くこととする。紅葉の父は尾崎惣藏、母の名は庸と呼んだ。尾崎家は代々伊勢屋と呼ぶ商家であつた。呉服屋説、米屋説等あるが明白でない。しかし父の代には廃業していた。というのは物藏は谷斎と号して、象牙彫刻の名人であつた。ところが名人肌が多い奇人性があり、江見水蔭によれば、九代目団十郎が煙草入れの筒を注文したところ、出来上がりが延引するので、それを与えたら早く作るだろうと当時としては大金の三〇〇円を送つた。谷斎はその金で金の延べ板を買い、それに領収証を彫つてすぐ送り返したという（『水蔭講演全集』二巻）。

谷斎は仮名書魯文らとも交際があつたが、本職のほかみずから幫間として花街に出没し、常に緋縮緬の紋付羽織をつけていたので、「赤羽織」と呼ばれた。

巖谷大四によれば劇場、回向院等の興行物では谷斎を「福の神」といつて木戸御免で出入りさせた。彼は場内でなじみ客の斟で酒の相手をし、祝儀をもらえば次の客の斟へ移動した。またその赤羽織も、寄進をうけた家の紋を方々につけた。近所の子供に人気があつたのは、菓子をはしいと子供たちからせがまれると、近くのひいきの家から菓子代をもらつて、菓子を買ひそのすべてを子供らに与えたからである（巖谷大四『尾崎紅葉』）。

この谷齋は明治二七年二月二日、フグ中毒で死んだ。紅葉は、かねがねこうした父の生き方はずかしいことに思っていた。それで、その葬儀等について、親しい硯友社同人にも知らせなかった。しかし紅葉の文学則文章という文章への苦心、その凝り方には、このような名人肌の工芸家の父の血を強くひいていると言わねばならない。

紅葉は明治五年五月一九日、母を失っている。数え年六歳の時である。そこで芝区神明町八番地の母方の実家荒木舜庵方で育てられることとなる。この祖父舜庵は漢方医であった。おそらく、幫間などしている父の奔放な行状を見かねて、孫の将来のことを思いやったせいであろう。荒木家はそれほど医業は盛んでなかったようで、内職に寒暖計の目盛りなどもしていた。

なお舜庵は滋賀県浅井郡早崎村平民吉川三左衛門の三男で、荒木寿山の養子、せんは旧幕臣今井清左衛門の次女に当たる（巖谷大四『尾崎紅葉』）。そうすれば紅葉には関西人の血も流れていることとなる。

幼いころ、長州征伐に江戸より出陣した武士たちの服装を真似て陣羽織に、旗本の子供がおもに結んだちゃん髷といった服装も祖父母の好みであったが、きわめて臆病であった。角兵衛獅子が現われると、家に逃げ帰った。しかし何事も几帳面な性格で、まっすぐになるべきものが曲がっていても、角なるべきものが丸くなっても、気に入らなかった。形の大小にかかわらず、そのものが完全無欠でない限り、手をふれようとしなかった。それはやがて文章への凝り性に結ぶ性癖のようであった。

なお幼時いろはかるたの読み役をつとめた。

七歳で梅泉堂という寺子屋にはいり、一〇歳のころ、寺子屋友達の質屋の子を顧問として、自ら社長兼記者となり、さらに職工、配達人をも兼ねて、半紙二つ折りくらしいの新聞を作る、新聞ごっこに興じている。そのころ、荒木方も同じように半紙二つ折りくらしいの読売新聞を購読していた。子供心にも活字への関心が早くも芽生えていたと言えよう。

明治七年のころ、桜川小学校に通っているが、家のすぐ近く浜松町に山田武太郎、後の美妙が住んでいて、親しくなった。武太郎の父吉雄は当時島根県警察長として単身赴任していたので、祖母と母と桶屋を営んでそこに暮らしていた。徳太郎が一歳年上であったが、親しく、相手を渾名で呼び合う仲であった。やがて文壇でライバルとなる不思議な因縁のもととなった。

明治一二年、徳太郎は田安門外の東京府立第二中学校（現在の日比谷高校）に入学してみると、しばらく縁が切れていた武太郎が二級上にいたのにめぐりあった。旧交が復活したが、徳太郎は在学二年で退学したので、またその縁が切れた。

退学後、芝愛宕町の旧仙台藩邸内にあった岡鹿門の塾で漢学を学んだ。岡は仙台の人で名は千仞、字を天爵鹿門と称し、詩文にすぐれた。初め昌平黌に学び、後京師を歴遊、四方の秀才と交わり、ふたたび東京に来て、大学史局書籍館に勤めたが、辞して北海に航し函館、札幌に赴き、帰途青森、秋田、山形を探勝したりして、知名の漢学者であった。その塾生は一名くらいであったが、紅葉は漢詩文の教養の基をここに受けた（岡田良策編『明治文人銘々伝』）。

更に後に石川鴻斎の崇文館でも漢詩文を学んでいる。

明治一五年になると、芝愛宕下にあった三田英学校へ入学した。この学校は、主として大学予備門にはいる学生を養成する学校であった。「郵便報知」（明17・1・7）は、同校の教授法の親切さ、課程のよくととのっていることで、前年および前々年の、この学校卒業生の予備門入学率が他校に比べて最高であったことを報じている。

徳太郎は明治一六年九月に大学予備門に入学できたのであった。

すでに徳太郎は文学趣味を持っていた。そのころ青少年の投稿雑誌として「穎才新誌」が、明治一〇年三月創刊され、刊行をつづけていた。その明治一四年二月の第二五九号に「柳眠」と題して、左のような漢詩を投じ掲載された。

細腰不_レ耐住_三鶯兒_一 裊々隨風措短離 昔日別離猶記否 愁眉未展折_三殘枝_一

予備門にはいるや、更にその志は募_つつて、丸岡九華ら六、七名と計り文友会という会を作り、盛んに詩文を作った。このころから緑山、後に紅葉の号を用いたが、共に生地芝の三緑山、紅葉山に因_よんでいる。

松原至文編の『尾崎紅葉』には、当時得意だったのは香奩_{くわん}体の詩として、次の二詩を載せている。

墨隄喜春詩

橋東買醉追晴暖 十里如雲花不斷

日暮江風堤上途 落紅輕点美人傘

吉原竹枝

鐘声無情離恨多 綺窓分手泣嬌娥

竹輿軌々霜堤路 輕載香閨殘夢過

青春の血がおのずからこうした詩となったのである。この文友会は一年半ほどで解散、つづいて、運動、遠足、演説の凸々会を作り、遠足には亀井戸、小金井、日暮里等へも出向いた。鴻ノ台へは一泊した折りの紅葉の狂詩が記録されている。

四面歛声非楚歌 虞姬行酒動秋波

醉來誰學頂王暴 席上少年春季多

硯友社結成

明治一八年三月、神田三崎町の下宿屋石野に、そのころ祖父母の家から出て下宿していた紅葉のところに、丸岡九華、石橋思案、久我亀石、そして予備門で紅葉と三度顔を合わせることとなった山田美妙が集まった。そして小説、戯文、紀行、都々逸、端歌、俳諧、和歌、すべてを網羅し、毎月一回原稿を集めて、紅葉と美妙が清書し、回覧し、批評を書き入れる雑誌を発行することを決めた。この社名を硯友社、雑誌名を「我楽多文庫」と定めた。もとよりそこを足場に文壇に出ようとする気持ちなど毛頭もなく、単なる筆のすざびに打ち興ずる遊戯的なものであった。

しかし、遠大な理想をもって出発したものが、何らの実を結ばず雲散霧消するかと思えば、漠然と始めたものが、意外な結果を生むことは、世上しばしば見ることである。硯友社の結社の例は後者で、全く他愛のない集まりがやがて明治前半期の文壇を彩る大きな文学結社と発展した。ただ戯文を記していた紅葉が、その中心として、前記の伝記の「序」にもある「もし彼れ微りせば、わが文壇は——分けて言はゞわが文章界は——いかばかり荒寥不毛なる原人的風光のまゝに残りたりけむ」という大きな存在となったのである。

紅葉はその時「硯友社戯則」を草した。

「一、戯則は規則の洒落にして、国音驥足に通ず。驥足は笑名抄（これで和名抄とよむのサ）に馬の足とあり、これは初の中こそ馬の足でも、本社舞台で腕を磨けば、つまり千両々々といふ価値が出るとは、ハテ深い意味ネ。

二、本社は男女老少粹不粹、水にすむ船頭、花をうる老爺、生きとし生けるもの、会員たることを許すなり。但し自惚

生酔の御客様は御入会堅く御断申上候。

三、本社は毎月一回、我楽多文庫を刊行す。これは売買禁制の品なれば、銭かねづくではとんと自由になりませぬ。むかしの名妓によくある奴也。

四、会員は毎月金拾銭を納むべし、と云ふと他人がましいが、矢張り例の京伝が流サ。

五、文庫は三門に種類をわけ、第一門を小説とし、心織筆耕と名け、第二門を戯文狂歌俳句新体詩などゝし、千紫万紅と名け、第三門を五三桐の飛花落葉(デユブ洒落るノ)と名け、狂句端歌都々逸落語謎とす。どれもこれも、とかく御気に入るの門なり。

六、おやしきでは不義をきつい御法度とす。本にては焼直しが大の禁物なり。それもコンガリ狐色なら編輯方が方寸の中にあります。

七、第六の戯則を破り、至つて腹の黒装束が、折々忍びこむときは、編輯方がすかさず曲者までと引戻しても、当身をくらつて取逃し、ウスドロの鳴物で紙上へあらはるゝことなきにあらず。方々御油断めさるな。

右の条々肝に銘じ掌へかき付、舐めて置くべき者也」

さらに紅葉は「半可通人」の署名で左のような披露、広告の文も書いた。

「我楽多文庫御披露

敬して曰くはチト大業。文して参るはやゝ艶めく。則ち書して以て才子諸彦に告げまつる。それ人各楽みあり、隣の壁から燈を盗みて、書読むも楽みなり。銅臭を弄ぶ守銭奴、一簞の食に事足るとする清貧家も、亦楽むところなからずやは。傾城の涙に家蔵の雨漏を顧みず、あるは二合半の寢酒に布袍打殺して飛んだ罪つくるも、亦罪障のひとつぞかし。されど隣の壁ぬかば尻を喰ふ恐なきにあらず。銅臭きはぢぢむさし。さりとして冷飯は腹こわばりて病や起らむ。家を持たねば傾城の雨漏る処なく、無一文にては寢酒も飲めず。あゝ何とせうどふせうと凝つては思案のいらばこそ、筆の林に閑居して、不善は為さぬ君子等の、快楽の一派和歌詩文の上品より小説狂文都々逸の心意気一切無差別書集め、我楽多文庫の名にしをふ、諸彦も我れも楽多き雑誌を月に編して、而して、読書余間の憂晴し、噫これ天下無上の快楽、俱にせんとの有志の君達、珠玉を空しく秘めたまはず、売らん哉／＼とのたまへば、我も言はん買はんかな／＼。

明治十八年弥生の末つかた

柳翠花紅楼のあるじ

右の硯友社の規則といい披露の文といい、まさに遊戲的で、格別、文学への真剣な態度ではないが、〈六×七〉の他人の作の剽窃類似を拒否していることなどには若干の潔癖性は見られる。

そして、この二つの文章を率先して紅葉が書いたということは、同人中、彼が最も熱心であり、また主導格であったことがうかがわれる。

紅葉はこのころ、江戸文学に親しんでいた。愛読したものとして、横井也有の『鶉衣』、森川許六の『風俗文選』、西鶴、近松、三馬、焉馬、ことに西鶴はその珍書を漁って、手写し、「一代男」「一代女」「五人女」などはそうであった。しかし京伝、馬琴はその好みにあわなかった。

「我楽多文庫」の書写本時代は、明治一八年五月から一九年五月まで八号つづいた。紅葉・美妙が最も熱心でその編集、筆耕にあたった。いきおいその中心の座にあった。紅葉はこれに「江島土産滑稽貝屏風」を連載したが、これは前年、石橋思案らと、江の島に旅したことをモデルにした。芝浦に住む三人の放蕩者が、家賃をふみたおし、江の島巡りをする。その途中の失敗を一九・三馬ばりの洒落と滑稽とで綴った戯作的なものながら、才気煥発、洒脱な作者の作風の萌芽は見られる。つづいて第八号から「偽紫怒気鉢巻」を載せた。これも洒落、うがちに、化政期文学の影響が見られる。

紅葉は三崎町の下宿石野家を出て、明治一八年末から、しばらく駿河台の坊城邸内の美妙の家に同居したこともあったが、荒木の祖父母が飯田町に移ってきたので、彼もそこに移った。

「我楽多文庫」もしだいに社友が増加してきて、回覧では間に合わないようになった。そこで印刷して配布するということになったのが、明治一九年一月から二一年二月まで、八冊つづいた。さらに反響が大きく、二一年五月から一般に売りますこととなって二二年二月まで一六冊、それから「我楽多」の三字を除いて「文庫」の題で二二年二月から一〇月まで一冊刊行されている。

「我楽多文庫」が、いよいよ印刷されるに際しても、紅葉は、左のような祝文を書いた。

半可通人 自楽